

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈11〉

— 平成 26 年度実施プログラム —

川崎億子 *1・小島正憲 *1・後藤佐智子・下内 充 *1
菅野道雄 *1・杉山 章 *1 杉山喜美恵・中尾正彦 *1
廣瀬敏史 *1・松川亜矢 *1・三羽佐和子・山田美恵子 *1

*1 東海学院大学人間関係学部子ども発達学科

要 約

平成 26 年度で 11 年目を迎える子育て支援プログラム「あそびの森」についての実践報告をする。1 年間で 10 プログラムが実施され、のべ 830 人の子どもとその保護者の参加があった。各プログラムは、授業の中で教員と学生で共に創り出された。各プログラムの内容、実施後の教員の気づきがまとめられた。

キーワード：子育て支援 学生の実践力向上 実践的な授業

1. 実践の概要

子育て支援プログラム「あそびの森」の実践活動は、「地域の親子・学生・教員」が協働でプログラムを実践し、育ちあう」という開設時の目標を受け継ぎ、平成 26 年度で 11 年目を迎えた。親子・学生・教員の入れ替えは毎年あるものの、地域の子育て支援に対するニーズに応えるべく、学生の実践力向上を期待し実践してきた。

平成 25 年度における運営上の課題として、主たる運営を四大部の子ども発達学科へ移すことを挙げていた(内山ら, 2015) が、平成 26 年度においても 10 プログラムのうち 8 プログラムを四大部の子ども発達学科が、2 プログラムを短大部の幼児教育学科で担当したため、この課題は、達成しつつあると考えてよいであろう。

平成 26 年度の取組については、10 回の開催が可能であることが、短大部幼児教育学科と四大部子ども発達学科の担当で、年度の当初に確認された。そして、各プログラムは、授業担当者と学生と共に授業の中で計画・実践された。

なお、案内(6. 資料 図 2)は、5 月に前年度参加者へ送付し、また、近隣の児童館、保育施設へ配布した。案内には個人情報の取扱いについて明示され、記録が教育・研究目的の利用であることを理解・了承できる参加者を募集した。

参加者は、のべ 830 名であった。(6. 資料, 表 2)

2. 実施プログラム

今年度実施したプログラム名と担当者を表 1 に示す。

それぞれのプログラムは、基本的に図 1 「あそびの森プログラム書式(記入済例)」に示される「時間」「内容」

「役割」「配置」「備考」の項目で構成される書式により計画された。各項目の記述については厳密に定めておらず、各担当者に委ねられた。記述される文章や欄外のコメントなどは、シラバスの指導内容、学生の実態などによって各回で異なったものとなった。

表 1 平成 26 年度 あそびの森 担当者

回	実施日	プログラム名	担当者
1	6月21日	親子で楽しく運動あそび!	山田美恵子
2	7月5日	カラフルスライムでゼリー屋さん	廣瀬敏史
3	7月19日	体育あそびを思いっきり楽しもう!	小島正憲
4	8月9日	五感をフルにつかった遊びを楽しもう!	川崎億子
5	10月11日	楽器をつかってリズム遊びをしよう	松川亜矢
6	11月15日	こころ・からだ・うた	菅野道雄
7	11月29日	子ども…秋の自然を楽しもう! 保護者…子育て懇話会	後藤佐智子・ 杉山喜美恵・ 三羽佐和子
8	12月20日	おもちゃランドで遊ぼう	中尾正彦
9	1月17日	親子で体を動かして遊ぼう!	後藤佐智子・ 杉山喜美恵
10	2月14日	もうすぐ春!	下内充

あそびの森 実施予定表 11/15 担当:菅野道雄

副:田中先生、白山先生

受講学生数16人、当日出席予定者数16人(1人午前のみ)

午前	午後	内容	役割・配置	備考
8:45		集合(あそびの森) 最終MTG 準備 ア)駐車場 イ)誘導(1F,5F) ウ)受付 エ)おねむの部屋	ア)学生4人、教員1人 イ)学生3人 ウ)学生5人、教員1人 エ)学生1人 他3人の学生は遊具に張り付き	場当たり、材料等確認 ※子ども、保護者への話し方やマナーについて学生に指導します。
9:50	13:20	受付開始		
10:15	13:45	ご挨拶 ①教員による挨拶 ②学生による挨拶とはじめの言葉	挨拶:加藤(和)	
		オープニング ①No.1体操 ②さんぽ	司会:加藤(和) 担当: ①柴沼、岩井 ②加藤(和)	※CD準備 ※電子ピアノ準備 伴奏:菅野
(10:35)	(14:05)	活動 ①かばん屋さん ②紙コップ屋さん ③紙皿屋さん	司会:長尾 担当: 伊川、岩井、柴沼、棚橋、中西 足立、加藤(和)、加藤(麻)、加藤(愛)、竹下、山田 梅村、西脇、林、廣川、松永	※安全に行えるようみんなで気をつけましょう。
11:15	14:45	エンディング ①うたと絵本「ぐりとぐら」 ②micci先生のうた遊び ③お別れ	担当: 加藤(麻)、廣川、棚橋	※製作物をバッグに入れてあげる(折れやすいので取り扱いに注意する)
11:40	15:10	片付け ※部屋全体に掃除機をかける ※換気		掃除機(751教室から借りる)
11:45	15:20	反省会		
12:00		昼食		

※あそびの森の部屋内は飲食禁止です。昼食は東隣の学生控室または1階学生ホールにて。
※服装に留意。アクセサリーは厳禁です。

図1 あそびの森プログラム書式(記入済み例)

3. 活動報告

(1) プログラム①

「親子で楽しく運動あそび！」

実施日・会場

平成26年7月5日(土) 保育実習室
AM 10:00～11:45 PM 13:30～15:15

ねらい

- ・親と子どものコミュニケーション促進
- ・体を動かすことで運動不足を解消
- ・日常生活に取り入れやすい運動の提供

参加人数 (子ども46名/保護者35名)

参加スタッフ 教員6名 学生22名

企画・準備

あそびの森の実践は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭をめざす学生にとって、様々な授業での学習の成果を初めて実践する場となっている。本取組では「リズム・表現遊び」に焦点をあてて取組んだ。

本取組は子育て支援活動を基本とし、子どもと保護者が一緒に家庭でも楽しみながら身体を動かすことができることを中心に、学生とプログラムを構成していった。また、子どもたちの自由な表現を大切にしたいという学生の願いを元に、企画と準備を行った。

本企画は、幼児から児童を対象にした運動内容を立案したが、実際の参加者は0歳児から小学校(高学年)までと、幅広い年齢層となった。また複数の子どもを連れた参加者もあり、様々なニーズに対応する企画力と実践力が求められる活動であった。

会場準備では、子どもの導線に配慮し、室内や遊具のレイアウトを工夫することで、安全に子どもが活発にからだを動かしたくなるような環境を整えた。また、室内温度の管理に心がけ、熱中症対策に留意した。

内容

I. 子どもたち・保護者と学生との出会いの場

- ①はじめの挨拶(教員・学生代表者)
- ②諸注意(学生)
- ③プログラムの説明(学生)

II. テーマパークへGO!!

・準備運動(Welcome!!)

親子でペアになり音楽に合わせてながら、心とからだの弾むリズム運動(準備運動要素)を行った。

・体を使った運動遊び

音楽やリズムに合わせて体を動かし、親子で協力しながら楽しんだ。イメージできる様々な形や乗り物、動物などの表現遊びを体験してもらった。

・遊具を使った表現運動

カラフルなフープやボール、レジャーシートやマットなどを活用し、目や耳などの五感を使った運動遊びを行った。成長に合わせて遊具の使い方を工夫することで、皆が楽しめる運動内容となった。

・リズム運動(ありがとう)

音楽の歌詞とリズムに合わせて、動きを創作したりリズム運動を行った。心とからだをほぐし、「ありがとう」をテーマに企画の最後を締め括った。

III おわりの会

- ①活動の意義を確認(学生)
- ②お礼(教員・学生代表者)
- ③さよならトンネル

総括・考察

今回の「リズム・表現遊び」活動は、回る・おきる・くぐるなどの基本的な動きを幅広く体験してもらった。その中で、子ども自らが動きのレパートリーを広げる姿や、動き方や場を工夫する場面が見受けられた。このことは、「学びの原動力」と「子どもの遊び」の関係性の強さを示すものとなった。そしてこの企画は、参加者にとって豊かなスポーツライフと健康な生活の基盤作りとなり、家庭との連携を図るとともに、地域との信頼関係を確立するものであるといえる。実践した学生は、子どもたちの実態を理解した指導法について、具体化する学習の場となった。また、座学と実践を統合する場で学生の大きな課題が明確になった。それは、想定外の時の行動の仕方が分からないことや、危険な場所が理解できていないことであり、安全に気を付けて行動できる能力が低いことである。実践力を積む上で、解決すべき重要な課題と捉えている。



プログラム①の様子

(2) プログラム②

「カラフルスライムでゼリー屋さん」

実施日・会場

平成 26 年 7 月 5 日(土) 保育実習室

AM 10:00~11:45 PM 13:30~15:15

ねらい

色水による混色遊びをしながら色の特性を知ったり関心を持つようにする。

スライムの新しい触感を楽しむ。

参加人数 (子ども 75 名/保護者 53 名)

参加スタッフ 教員 6 名 学生 22 名

企画・準備

あそびの森での実践演習は、参加した多くの学生にとって、保育士の卵として自ら企画運営を行って子供と接する最初の機会である。

その後の保育園実習にもつながる実り多い体験であってほしい。企画の段階では可能な限り学生自身が意見を出し合い、納得のいくようにプランを作り上げていくことを心がけた。

色を使った混色遊びをすることまではすんなり決まったが、アウトプットをどうするかで意見が分かれた。最終的にスライムを作ってゼリー屋さんとすることになった。ただ色水遊びやスライム遊びをさせるより、おままと風にすることで、より自分の作るものに愛着を感じたり、イメージをふくらますことが出来るのではないかと考えたからである。

準備では、活動計画を作成し役割分担を行った後、スライム作りなど技能の習熟、その他子供の作業着となるビニール袋のポンチョ作り、持ち帰り用のゼリー容器の準備、またスライムで遊べる的当てなどを作った。

内容

当日は夏の暑さも和らぎ多くの参加者があった。活動は、午前と午後に分けて行い、共に、手遊び等の導入→色水遊び→スライム作り→スライム遊びという流れで行う事とし、最後に作ったスライムをゼリーの容器に入れて持ち帰ってもらうこととした。

初め学生達はどうか子供と関わってよいのか戸惑いが見られたが、実際に各テーブルで色水遊びが始まると、「どんな色が出るかな?」だとか「きれいな色が出たね」などと声掛けをしていた。ただ食紅の粉を入れる分量が多くなりすぎる子供や、スライムが固まらない子供がいて、学生の説明が上手く伝わっていない部分が見られた。またビニールカップが足りず一人が買い出しに行く等ばたばたした。全体の流れもメリハリに欠け、「今は何の時間?」といった時間帯があった。

こういった午前の部の反省から、午後の部ではいくつかの改善が見られた。まず最初の説明をするときに、大量のスライムを手でのぼして見せて子どもの関心を引いたり、活動の方向性を明確にしていた。色水遊びでは、水に適量の食紅をあらかじめ溶いたものをペットボトルに何色か用意した。こうすれば美しい透明感を楽しみつつ混色遊びが可能になる。また、水、洗濯のり、ほう砂の分量のメモリを記したプラスチックコップを倍用意して全員が確実にベストの状態のスライムを完成させられるようにした。更に説明のときや終了時に音楽を流しながら声掛けをしたりして、活動全体にメリハリをつけていた。午前はほう砂の誤飲を気をつけるあまり固さがあった学生も、「お姉さんが魔法の水を掛けるよ」とか、「でもこれを飲むとお腹がいたいいたいになっちゃうよ」などと、小さな子どもにも響く言葉を選んで声掛けをしていた。

カラフルなスライムが出来上がると、子ども達はそれぞれの当てゲーム、スライム入りのタッパーに足を入れる体験、ゼリー容器にスライムを入れるおままと遊びに分かれて遊んだ。夏の日にはスライムのひんやりとした感触が気持ちよいか、特に足踏みは人気で、子どもも親も大喜びしていた。しかし終わった後の足拭きが大変で、数人の学生だけでは明らかに対応のキャパシティを越えていた。



プログラム②の様子

総括・考察

造形活動は、多くの場合何らかの物的な結果を伴う。もちろん結果より過程が重要であることは言うまでもないが、指導者としては出来る限り良い結果へと導き、子どもに成功体験を持ってもらいたいと願う。かといってあまりにもレールを引き過ぎてしまうと、子どもの達成感や学びの機会を奪いかねない。

今回の活動では、準備段階も含めて学生達は、年令や発達段階に応じて何をどれだけ準備すれば良いのか試行錯誤した。そして実際に子どもと関わる中で、どのようにすれば、子どもの『自らの力で獲得する成功体験』に

結びつけられるかを、それぞれ考え、そしてその難しさを実感したはずである。今回午前の部で、一組の親子がスライム作りを成功させられなかった。活動後の振り返りシートでも複数の学生が、「スライム作りに失敗してしまった子の為に何か対策を考えておくべきだった」と記していた。こういったことから学生たちは造形活動における準備の大切さを学んだことだろう。

しかしながら午前の部と比べ午後の部は、活動の流れ、子どもとの関わり、学生間のまとまりも飛躍的に改善されたことは誰の目にも明らかで、私自身改めて学生達の対応能力、潜在能力を知ったし、頼もしく感じた。振り返りシートでも、「前半の反省を生かして後半は皆が一つにまとまりスムーズに進んだ」という感想がいくつも見られ、学生にとってもよい学びの場となったと思う。

個人的にはスライムを作ったあとの活動がやや方向性の無いものになったことが残念であった。計画の段階で「ゼリー屋さん」のような飾ったりイメージを楽しむ活動か、的当てや足踏みのような体を動かして材料と関わる活動か、もっとねらいを明確にしておけば、より良い準備が出来たのではないだろうか。

今回の経験をぜひ今後の指導に生かしていきたい。

(3) プログラム③

「体育あそびをおもいっきり楽しもう」

実施日・会場

平成26年7月19日(土) 保育実習室
AM 10:00~11:45 PM 13:30~15:15

ねらい

- ・身近なものや学生が準備した道具を使って、体育的な運動あそびを行う。
- ・手あそび、リズム体操、じゃんけん列車など多種多様な運動あそびを通して、子供(保護者も含む)と触れ合い、学生の経験値を高める。

参加人数 (子ども60名/保護者43名)

参加スタッフ 教員6名 学生22名

内容

当日のプログラム

午前の部

- ①挨拶とはじめの言葉
- ②手品：子どもの反応◎
補足：手で持っているペンを、手元から消す手品を行った。
- ③妖怪第一体操：子どもの反応◎
- ④バスに乗って(親子あそび)：子どもの反応◎
- ⑤ねことねずみ(親子あそび)：子どもの反応◎

- ⑥猛獣狩りに行こうよ：子どもの反応◎
- ⑦宝探し：子どもの反応◎
- ⑧整理体操と終わりの言葉
※子どもの反応については、主担当教員が4段階の基準で行ったものである。(◎・○・△・×)

午後の部

- ①挨拶
- ②アンパンマン体操：子どもの反応◎
- ③ピカチュウ手あそび：子どもの反応◎
- ④じゃんけん列車(親子あそび)：子どもの反応◎
- ⑤スプーンリレー：子どもの反応◎
- ⑥新聞じゃんけん：子どもの反応◎
- ⑦ダイコン抜き：子どもの反応◎
- ⑧まとめと終わりの挨拶：子どもの反応◎

補足：体育あそびとしてのまとめを行う際、子供に言葉のみの説明になると伝わりにくい点から、ラミネート作った。子どもたちが体をたくさん動かした後は、好き嫌いせずご飯を食べるようにと促し、体と食に繋がるラミネートと言葉を融合させながらメッセージを送っていた。

- ⑨トンネルで子どもを見送る：子どもの反応◎



プログラム③の様子

総括・考察

あそびの森は、『子育て支援の場』『学生の学び場』など、実践的に経験できる貴重な時間であることから、あそびの森の主担当をすることになった時点で、ある決め事をしていった。それは、学生が主役になり、私はあくまでもサポート役に徹するよう配慮することである。学生が主役になるということは、企画・準備・運営・片づけに至るまで学生が全責任をもって行うことである。特に企画(運動あそびの内容を考える)の際は、私の意見過多にならぬよう配慮し、学生の意見を尊重しながら多少の軌道修正をするスタイルにした。また、2部制(午前

の部・午後の部) ということで、学生一人ひとりに運動あそびの担当ができるよう配分した。

あそびの森は、子ども学実践演習の授業においてあそび内容を企画し、それを練習していく。正直なところ、練習時間が少ない中ででの取り組みになることから、私も学生も不安を抱えながら本番を迎えた。しかし、あそびの森が始まってからは不安などこ吹く風、子供たちの笑顔に学生も虜にされ、一緒になって運動あそびを楽しんでいた。多少のミスは笑顔でカバーをしながら、自分の役割を全うしていた。私自身も本番の完成度に驚嘆し、学生の底力を見せつけられた。また、学生たちもこのあそびの森を通して、実践でしか学べない経験を積むことができたこと、満面の笑みで話をしてくれた。ぜひ、学生たちにはこの経験を生かして、さらなる活躍を期待したいと思う次第である。

(4) プログラム④

「五感をフルにつかった遊びを楽しもう！」

実施日・会場

平成 26 年 8 月 9 日(土) 保育実習室

AM 10:00~11:45 PM 13:30~15:15

ねらい

子どもは感覚をフル活用して夢中になって遊ぶ中で、発達と共に諸感覚の統合がなされていくことを授業で学んだ。

あそびの森では、「祭り」をメインテーマに、学んだことを生かして、五感をつかった遊びを提案し、子どもたちの遊ぶ様子から、提案した遊びが子どもたちにとって楽しめるものだったかどうかを検証する。

また、将来保育者や教員になることを希望している学生たちなので、子どもたちに伝わる話し方、子どもたちに適した援助の仕方、配慮の仕方についても、あそびの森の活動を通して実践的に学ぶ。

参加人数 (子ども 61 名/保護者 41 名)

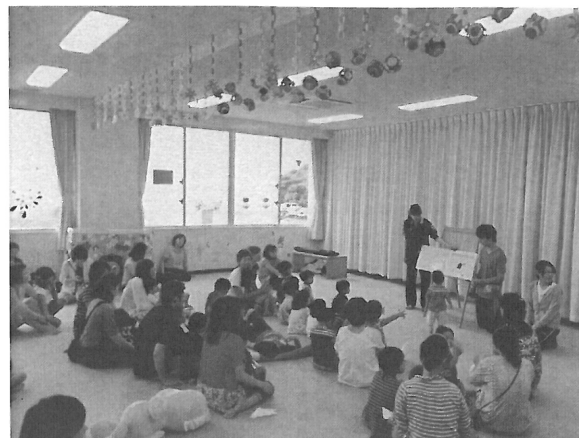
参加スタッフ 教員 4 名 学生 11 名

内容

- ・オープニング：手遊び
- ・リズム遊び「動物の足音」
- ・運動遊び「おみこしりレー」
- ・制作遊び「音花火」
- ・絵本の読み聞かせ

総括・考察

担当する学生は総勢 11 名で、午前も午後も一人二役以上の役割があり、一人ひとりが担当した役割をしっかり果たすことが求められていた分、責任も重く、緊張感



プログラム④の様子

も伴い、充実した活動になったと思う。

当日は、強い台風 11 号が四国から紀伊半島へ接近中のため、その影響で朝から時折横殴りの雨が吹き付ける中、駐車場の係りは濡鼠になりながら、雨の日にもかかわらずあそびの森に参加して下さったご家族を笑顔で迎えた。

午前中のオープニングでは、学生の緊張感が高く、練習時よりも元気のない声で「はじまるよ♪はじまるよ♪」と手遊びを始めたが、子どもたちの声に励まされ、学生も次第に笑顔で活動できるようになった。以下に、学生たちの声の一部を紹介したい。

- ・本番前は、「子どもたちが遊んでくれなかったらどうしよう」と不安だったが、リズム遊びでは、うさぎのぴよんぴよん跳ねる動きが人気だった。子どもたちは、跳ねたり走ったりする元気な動きが好きなかもしれない。
- ・「おみこしりレー」の説明をする際、子どもに分かりやすく伝えることができなかった。保育や教育の場では、子どもたちに伝わるような声の大きさ・速さ、言葉遣いなどを予想して、しっかり準備することが大切だと分かった。
- ・おみこしりレーで、年少の子どもたちのグループ担当になったが、アンパンマンの絵を独り占めしようとした子がいて、とても驚いた。まさか、アンパンマンの絵の取り合いになるとは思っていなかったので、子どもと関わる時は、色々なことを予想して動かないといけないと思った。
- ・音花火の活動を担当して、作り終わってからみんなで一斉に花火を鳴らすまでの時間を取りすぎて、ぐだぐだになってしまったり、作れたのはよかったけれど、うまく音が鳴らせない子がいたりして、子どもたちに合った遊びを計画し、うまく展開することができな

かったと思う。

- ・あそびの森の活動・運営を担当してみて、子どもへの関わり方について、注目してもらうことの難しさを学んだ。子どもにとって「分かりやすいことば」とはどのようなものか、考えさせられた。子どもは、物事をどのように話すのか、その話し方などを観察することで、子どもにとって「分かりやすいことば」が少しでも理解できるようになるのではないかと思う。
- ・全体的に練習不足で、子どもたちに遊びを提案するだけで手いっぱいになってしまった。自分たちが不安でいっぱいなのに、子どもたちを楽しませることなどできない。経験が少ないから本番での対応も中途半端になってしまう。まず、普通の状態でできるように準備をして、基盤がしっかりしていないと何事もうまくいかないと分かった。

学生たちは、午前中の活動を振り返り、不十分だった点は、午後の活動で改善しようと取り組んでいた。参加してくださった子どもたちのお陰で、様々なことを学ぶ貴重な機会になったと思う。

(5) プログラム⑤

「楽器をつくってリズム遊びをしよう」

実施日・会場

平成 26 年 10 月 11 日(土) 保育実習室
AM 10:00～11:45 PM 13:30～15:15

ねらい

身近な物で手作り楽器を作り、それぞれの音の違いを楽しむ。

参加人数 (子ども 30 名/保護者 22 名)

参加スタッフ 教員 5 名 学生 14 名

内容

本活動は、子どもたちが身近なところにたくさん音を感じ、身近な物で音遊びする経験ができるよう、学生が以下の内容で企画し運営したものである。

当日のプログラムは次の通りである。

- 1) はじまりのあいさつ
- 2) 導入
 - ①手遊び
 - ②ようかい体操
 - ③絵本の読み聞かせ
- 3) 活動
 - ①楽器作り
 - ②音楽に合わせて楽器を鳴らしてみよう
- 4) おわりのあいさつ

主となる 3) 活動において、次の 4 つの楽器を作る

コーナーを設けた。

- ・いちげんギター
- ・ギロ
- ・マラカス
- ・でんでんだいこ



プログラム⑤の様子

これらはそれぞれ、「弾く」、「擦る」、「振る」、「叩く」という異なる 4 つの音の出し方を踏まえたうえで、学生が話し合って作ることを決めた楽器である。

4 つの楽器を子どもたちに紹介したあと、作りたい楽器のコーナーへ移動してもらったが、マラカスが非常に人気で子どもたちが殺到していた。

しかしながら午前の部では導入の時間を長く取ったことで楽器作りの時間が短かったこと、また楽器作りの工程で子どもには難しいものがあったことから、2 つほど楽器を作って時間切れになってしまった子どもが少なからず見受けられた。

これらの反省から、午後の部では導入を短くして活動の時間を増やし、楽器も難しいところは下ごしらえをしておくことにした。その結果、ほとんどの子どもが 4 つの楽器すべてを作ることができ、前述のねらいに到達することができた様子であった。

午前の部では子どもたちの平均年齢が高く、午後の部では低かったために、特に導入③絵本の読み聞かせにおいて、絵本を『おばけパーティ』から『だるまさんが』に変更して実施した。また、活動②において、楽器を鳴らすだけでなく曲に合わせて皆で歩いたことで、一体感が生まれたのではないかと思われる。

総括・考察

担当の学生は、前期「子ども発達演習」において R. マ

リー・シェーファーの提唱するサウンド・エデュケーションを体験したり、身近な物で様々な音を作って絵本に効果音をつけたりといった活動を通して、普段何気なく耳にしている「音」について学んできた。

本活動はこれらの知識や経験のうえに活動内容を吟味したもので、子どもたちが身近な「音」で遊ぶこと、「音」で交流することを目指したものであった。

午前は反省すべき点が多く、これらを達成するに至らない様子であったが、ねらいを共通認識していたことで午後には大部分を修正することができた。

また、担当の学生は既に2年次にあそびの森での実践を行い、3年次前期にはえほんの森での実践を行った経験もあるためか、午前の反省をもとにした修正の早さや臨機応変な対応が随所に見られ、実践活動の実りの多さを感じさせた。

本活動を通しての所感を発表し、課題としてまとめたなかには、「何をメインとして活動するのかをよく考えて時間配分しなければならない」、「様々な場面を想定し、時間や道具など余裕をみて準備しておくことが大切だと感じた」、「子どもの発達段階について十分な知識をもち、それに合わせて内容を考えるべき」、「子どもや保護者の方への対応方法、声かけの引き出しを増やす必要がある」などの意見があり、あそびの森が学生にとって非常に有意義であったことを物語っている。

このように、プログラムを企画し運営すること、また活動内容を反省し修正していくこと、子どもや保護者を実際に目の前にしたとき自らに足りないものを知り、今後の課題として明確にすることなど、あそびの森にはそれならではの学びが多く挙げられる。これらの学びをいかに次の学習にスムーズにつなげるかをよく検討することが筆者の今後の課題である。

(6) プログラム⑥

「こころ・からだ・うた」

実施日・会場

平成26年11月15日(土) 保育実習室

AM 10:00~11:45 PM 13:30~15:15

ねらい

・こころに感じたことを、音楽に合わせた体の動きや身近なものを使った造形あそびで表現したり、うたに表したりする。

参加人数 (子ども45名/保護者28名)

参加スタッフ 教員4名 学生18名

内容

当日のプログラム

①オープニング

「音楽に合わせて」

(1) No.1 体操

(2) 「さんぽ」に合わせて行進しよう

②身近な材料による造形活動

「材料ごとに別れた3つのブースをめぐる」

(1) かばんやさん

(2) 紙コップやさん

(3) 紙皿やさん

③エンディング

「ミッチ先生のうた遊び」

「ふうせん」のうた

「聴くこと」「見ること」が「表現すること」に繋がるような活動をおこないたいと考え、①音楽に合わせて体を動かす、体操とマーチング→②身近な材料として、紙皿と紙コップを用意し、学生たちのアイデアによるそれぞれいくつかの制作例を参考に、子どもたちが各自で制作する活動→③音楽からイメージした動きや言葉による、創造的な音楽活動を、それぞれ、(全体)→(個別)→(全体)という流れの中で行うようにした。

①の活動では、あらかじめ振り付けの決まっているもの(「No.1 体操」と、音楽に対する反応により自由性のあるもの(「さんぽ」)の2曲を用意した。

②の部分での、具体的な内容としては、(1)開催日が「七五三」の当日にあたっていたこともあり、お土産として千歳飴を用意し、それを入れて持ち帰る手提げ袋の意匠を子どもたちに描かせるコーナー、(2)紙コップを材料として、けん玉、人形、妖怪ウォッチのいずれかをつくるコーナー、(3)紙皿を材料として、フリスビー、独楽、楽器(タンブリン)のいずれかをつくるコーナーを設け、子どもたちはそれぞれをめぐる造形遊びを体験した。

③は、再び全体活動とし、風船の色が連想させるさまざまなものを歌詞として、即興的に歌がつながっていく「うた遊び」を行い活動のまとめとした。

総括・考察

①の活動は、参加した子どもたちの大半にとって既知の曲であったようで、積極的に体を動かして参加する様子が見られた。

②は、各コーナーに分かれての活動であったが、ほとんどの子どもがすべてのコーナーを回って作品をつくることができていた。

そのため、準備した材料が足りなくなるコーナーも出てきてしまった。

③では、「絵本を使ったリトミック」の活動(「ぐりと

ぐら)も予定し準備していた。しかし、②の活動に時間を取られ、実際には行うことができなかった。午前の部終了後、②のコーナーの短縮を図るか、「ぐりとぐら」あるいは「ふうせん」のいずれかを省略するかについて再検討をし、午後も、午前同様「ぐりとぐら」を割愛することとした。

必要な材料や時間配分への見通しが甘かったので、次の機会にはより綿密な準備が必要であると感じた。



プログラム⑥の様子

(7) プログラム⑦

「秋の自然を楽しもう～リース作り～」／懇話会
実施日・会場

平成26年11月29日(土) 保育実習室

AM 10:00～11:45 PM 13:30～15:15

ねらい

- ・秋の自然物に触れる。
- ・手指を動かしたりイメージをふくらませたりして、作ることを楽しむ。

参加人数 (子ども42名/保護者28名)

参加スタッフ 教員6名 学生41名

内容

1. はじまりの会・あいさつ

<午前>

- ・手遊び 「やきいもグーチーパー」
- ・動物あてクイズ
- ・絵本 『おかしなかくれんぼ』

<午後>

- ・手遊び 「どんぐりころころ」
- ・シルエットクイズ

2. リースを作る

- ・作り方の説明を聞く
 - ・材料に触れたり、選んだりして作る
 - ・片づけをする
3. おわりの集い
- ・作品発表など、製作の振り返りをする。
 - ・歌 「あわてんぼうのサンタクロース」



プログラム⑦の様子

はじまりの会では、クイズや絵本の読み聞かせなどを行うことで、製作への導入としてスムーズに活動の移行ができた。

リース作りでは、多種の自然物を材料として準備してあったため、興味を持って活動したり、「ようちえんでみた」「これなに？」と会話をしながら、自然物に触れたり比べたりする様子が見られた。また、学生が「どのようにしたいか」を子どもに尋ね、イメージをつかみながら、活動を進めていた。

おわりの集いでは、みんなの前で木の実を飾ったリースの作品を見せながら、ちょうちょ結びなど頑張ったことを話すと、子どもの表情に満足感が感じられたり、保護者に笑顔が見られたりした。

総括・考察

今回は、懇話会が開催されたこともあり、事前に子どもが保護者から離れて活動することを想定して、どのようにかわり、子どもと親しくなっていくと良いかをシミュレーションして臨んだ。学生とペアを組んで活動を進めていけるように計画し、出会いの場面から積極的に子どもとかかわり、親しくなろうとしていた。また、安全面に配慮した環境構成には、子どもの動線を考え、より細やかな工夫も見られた。

「あそびの森」の計画・実践を通して、子どもたちの主体性と、保護者支援を考える場とした。子どもの主体性ということでは、大人(学生)が作ってしまったり、させられる活動にならないために、工程の中で枝と枝を

組み合わせたり、糸を巻いたりなど、個人差に応じて難しいと予想されることを「子どもができるようにするには…」と、あらかじめ意識し、学生が手を貸すだけでなく、一緒に作る楽しさを味わえるようにする方法を考えておいたことで、学生の言葉がけに反映されたと考えられる。一方、保護者支援の観点では、子どもの活動の振り返りを保護者同席の場で行うことにより、皆の前で照れながら話す子どもの姿を見たり、学生の話から、作っているプロセスがわかったりしたことで、客観的にわが子を見つめなおす機会になり、保護者の笑顔に繋がったと思われる。

学生の活動記録から、

- ・材料の準備の大変さを実感するとともに、準備に手をかけることで、配慮など分かることもあったり、子どもの姿が予想されたりするので、大切だと感じた。
- ・あらかじめ、子どもへの対応を考えておいたことで、他の場面でも、どうしたらよいかをその場で考えることができた。また、1対1でじっくりかかわってみると、子どもが見えてきたように思えた。
- ・いくつかの予想を立てておいたことで、子どもとうまくかかわることができ、子どもが楽しかったことをお母さんに話し、それで、お母さんが笑顔になって自分に話しかけてくれたことがうれしかった。

など、保育の現場へと繋がる学びや喜びがあったようだ。

個々には課題も多く残ったと思われるが、この取り組みの中で、「子どもにとって…」「保護者にとって…」そして、「自分自身にとって…」の価値を考える機会になったのではないだろうか。

(8) プログラム⑧

「おもちゃランドで遊ぼう」

実施日・会場

平成26年12月20日(土) 保育実習室

AM 10:00~11:45 PM 13:30~15:15

ねらい

クリスマスツリー等を作ったり、雪だるま等で遊んだりすることで季節の行事に親しむ。

参加人数 (子ども45名/保護者28名)

参加スタッフ 教員5名 学生26名

内容

当日の流れは以下の通りである。

★プロローグ

「赤ずきん」(紙芝居)

★オープニング

①はじめの挨拶

②先生の話

③「妖怪体操」

④「手遊び」

⑤コーナー紹介

★ブース活動

①的当て

②クリスマスケーキ作り

③細工遊び作り

④雪だるまと雪合戦

⑤クリスマスツリー作り

(ギターで歌おう)

★エンディング

①「エビカニクス」

②「読み聞かせ」(クリスマス関連)

③おわりの挨拶

★エピローグ(送別)

ゼミ生21名(内、3名公欠で参加は18名)、他ゼミ生1名、4年教職実践演習7名の合計26名の学生スタッフで活動した。

ゼミでのねらいは、「実践力を身につける～自分たちで考え、行動し、高め合う『自己指導能力』を育成する～」とし、準備段階から活動内容ははじめ時間管理まで学生たちに任せた。この間、担当教員はファシリテーターとして位置付け、学生たちの自主的・自治的活動の促進役であった。

総括・考察

最初のゼミ活動の際に、21名(男子11名、女子10名)の学生を5つの班に編成した。本来は班編成も学生たちに任せる予定だったが、まだ時期尚早だったようだ。担当教員に一任されたので、男女混合の均等化したグループを編成した。

当面の班活動は調査活動とディスカッションを中心にを行った。テーマは、「幼児の発達段階と発達課題について」「保護者が望む子どもの発達とは」「子どもにとって遊びとは何か」「幼児に必要な遊びや活動は何か」などである。班で討議した後、全体討議を行う討議の二重方式を行うことで、全員参加のディスカッションと意識高揚が達成でき、班相互の連携協力と適度な競争が行われた。年齢をもとにした多種多様の遊びが提起された後、室内、人数、発達段階、季節、安全面、意義、興味関心等を観点として、あそびの森活動を絞り込んでいった。これより後は、班独自活動が中心になっていく。

まず、班で2つの活動を考え決定した。遊びの森の活動での「ブース活動」と「オープニング・エンディング活動(または進行役)」である。重なり合わないが連携

できる活動にするために、担当教員（のちに進行役の学生）はコーディネートしていった。その後は、班でPDC Aサイクルに基づき、班活動を運営していった。たとえば、活動場所、時間配分、進捗状況の確認、分担、準備する物など、各班で自己管理していくようにした。もちろん、最初から5つの班全部が自治的活動（自己指導能力）をしたわけではなく、各回の授業のまとめで各班の活動状況や活動方法を交流し合い、学び合い（いいところ取り）を繰り返す中で、担当教員は指導者からコーディネーターへ、最終的には見守る役割に変わっていった。全体リハーサルも学生自身で企画・運営し、総括する中で当日を迎えた。

当日は、進行役がサンタ、トナカイ、雪だるまの着ぐるみを着たり、各班各自が自主的に思い思いの雰囲気作りをして場を盛り上げていた。そして、午前の部の反省会でも出された意見をもとに、午後の部は改善運営された。最後に一人一人が活動を振り返っての感想文を書いたが、「自己指導能力の育成」のめあては達成したと全員が総括していた。今回の活動は将来の学級運営につながっていく重要な経験をしたと思われる。



プログラム⑧の様子

(9) プログラム⑨

「親子で体を動かして遊ぼう！」

実施日・会場

平成 27 年 1 月 17 日(土) 保育実習室

AM 10:00～11:45 PM 13:30～15:15

ねらい

- ・だれ一人けがをすることなく安全に活動を終える
- ・子どもたちが冒険を楽しめるよう各自がそれぞれの役割を果たす

・全員で協力して活動をもりあげる

参加人数 (子ども 48 名/保護者 33 名)

参加スタッフ 教員 5 名 学生 30 名

内容

「身体を動かしての親子あそび」というテーマは非常に活動範囲が広い。そこで、どのような活動にしたいかを学生が自分たちで考えられるように配慮した。

ただ、ゲームやあそびなどを細切れのように次々にさせていくのではなく、一つのテーマのもと、流れのある活動にしたいと考えた。

授業の中で学生たちが考えた活動のテーマは、「冒険」であった。そこで、午前、午後の2つのグループに分かれ、どのような「冒険」をしたら子どもたちが楽しいと感じるか内容を話しあい計画をたてていった。最終的には以下のような流れになった。

<午前>

1. 手あそび「ひげじいさん」
2. 絵本『やっぱり山ぞくになったねこたち』
冒険にでかける気持ちを高めるために選択した。
3. 制作「バッグ」
自分だけの「バッグ」を作って冒険にでかけよう！
4. 新聞おりたたみゲーム
新聞を船にみたくて、海へでかける
5. ふうせんつぶし
島に上陸したらいっぱい岩がころがってきた。
みんなで岩をつぶそう
6. おにたいじ
その島はおにがしまだった。みんなで鬼をやっつけよう
7. たからばこ
鬼が持っていた宝箱、あけたらメダルが入っていた。みんなにメダルをプレゼント
8. おわりのつどい
みんなで楽しかった気持ちを共有する
歌、おどり「鬼のパンツ」

<午後>

1. たからのちず
宝の地図を見つけた
2. 制作「剣」
自分で作った剣を持って、宝物を探しに行こう！
3. 新聞おりたたみゲーム
新聞を船に見立てて海へ出港だ。落ちたらサメがいっぱいいるよ。落ちないようにがんばろう

4. ゲーム「おちたおちた」

島に上陸したら、その島にはくだものや木の实がいっぱいあった。たくさん食べて元気をつけよう

5. おにたいじ

その島には鬼がすんでいた。みんなで鬼をやっつけよう！

6. たからばこ

鬼をやっつけたらたからばこをみつけた。何が入っているんだろう。みんなでたからを山分けだ

以上のようなストーリーを考え、そのストーリーの中でゲームや制作を考え、メダル、背景、鬼など必要なものを授業の中で準備した。



プログラム⑨の様子

総括・考察

全体的には楽しい活動になったと思われる。「ごっこあそび」は子どもにとって重要な活動の一つである。また「冒険」というテーマは子どもたちにとってわくわくするものといえる。

「新聞おりたたみゲーム」、「おちた、おちた」、「ボール投げ」という独立した活動をこなしていくのではなく、それぞれのゲームにどのようなおもしろさがあり、ストーリーの中でどのような位置づけがあるのかを考えながら計画をたてることは今後、保育者を目指す学生にとって意義のあることだと思われる。

しかし、このような活動はしっかりとした準備がなされないと面白さがでてこない。今回は準備時間が十分とれなかったのが残念である。また、比較的年齢の低い子どもたちにとって楽しめる活動であったかは疑問が残る。今後、対象年齢をしばるなど考えていく必要がある。

(10) プログラム⑩

「もうすぐ春！」

実施日・会場

平成 26 年 2 月 14 日(土) 保育実習室

AM 10:00~11:45 PM 13:30~15:15

ねらい

春が近いことを思い起こさせるような内容として、今から明るい楽しい時期が来るという感覚を子どもたちに与える。そうして冬の寒い季節をのりこえる力と希望をもたせるような活動の場とする。

参加人数 (子ども 41 名/保護者 26 名)

参加スタッフ 教員 5 名(うち短大 1 名) 学生 18 名(四大)

内容

「子ども学文化演習」(3年生)のクラスの学生 12 名を 4 つのグループに分けて、それぞれで春を思わせるものを意識して出し物(パネルシアター、ブース)を考えてもらった。さらに別のクラスからも 6 名がパネルシアターとブースに参加して以下のような内容となった。

パネルシアター:「今日の出し物—今日の“メニュー”は何?」(オープニング, 20 分), 「きつねのつねた」(パネルボードによる寸劇, 20 分)

ブース巡り:

1 ポコポコ歩き (1 サイクル 20 分)

[牛乳パックからしっかりした足場を自作し、それに乗って歩く。]

2 オニ退治コロコロボーリングメダルもらえるよ (1 サイクル 15 分)

3 チョコレート・フォトフレーム作り (1 サイクル 15 分)

4 手作りケンダマであそぼう (1 サイクル 15 分)

はじまりの会では、子どもに人気の「ようかい体操」を全員で踊り、体を動かした後で、開催者の挨拶、「今日の出し物—今日の“メニュー”は何?」とほぼスムーズに進めることができた。

ブース巡りではあまり時間通り進めることはできなかったが、どのブースにも均等に参加者が集まり、親子ともども楽しそうな笑い声も聞こえて少数の参加者の割にはにぎやかな会となった。

パネルシアター「きつねのつねた」では、ほぼ全員がパネルボードの前に集まり、静かに話を聞いた。

終わりの挨拶が終わってもなかなか帰らない子どもも(いつものように)いたが、それだけ愛着をもっていることとして喜ぶべきであろう。

総括・考察

それぞれの出し物では、ほぼ1か月前から準備を始め、使用する手作りの小道具をグループごとに自主的に集まり作業を進めた。それぞれグループごとに、今まで指導を受けた教員の研究室を訪ねて助言をもらった。教科内容にはそれほど積極的に取り組まない学生も、イベントの日は間違いなく来るためか、計画的に動いていたのは印象的であった。

反省会の後で書いてもらった反省文を読むと、どのグループも完璧と言えるところはなく、かなり“くやしき”をにじませるものが多くあった。

今回のような企画・運営担当の経験は今回だけであるが、複数回あれば学生の成長はもっと大きなものがあるのではないかと感じた。施設等での実習とは違う経験ができるようで、もっと多くの時間がとれるように今後検討したい。

なお、パネルシアター「きつねのつねた」は、当初予定になかったが、ブースだけでは少し時間が持てない場合も考えて追加することにした。こちらの方はまだ十分に練習を経た成果といは言えない出来栄であったが、参加した親御さんたちの暖かい拍手に、準備した学生もやりがいを感じたに違いない。

概してこのような企画では保護者の方々是非常に好意的、協力的で学生はそれなりにのびのび学ぶことができる。反省会では厳しい意見も出たが、学生だけで企画して、準備し、一般の方々に喜んでもらえる機会を設けたことは貴重な経験であったと思う。



プログラム⑩の様子

4. 全体の総括と今後の課題

本取組の報告も11年目を数えるまでになった。申込書のコメント欄に「毎年楽しみにしている」「〇〇（プログラム名）は絶対に参加したい」「大学生のお兄さんお姉さんとかかわりが楽しみ」「いつもありがとうございます」と記述していただけることもある。本取組への評価の「一部」として、とりあげることもできよう。本取組は、純粋に子育て支援活動と学生の実践力向上を目的に行われてきており、参加者へのアンケートやインタビューなどの評価活動は実施されていない。乳幼児を連れた保護者に対する負担を考慮してのことであるが、実践活動の評価のためにも、参加者による評価は今後必要になろう。

一方、学生の実践力向上という観点からは、授業内で振り返りのレポートの提出が求められており、さらには毎年学期末に授業アンケートがとられている。しかし、年度間や、各回間の比較・検討などは、行われていないため、今後の課題となろう。

このような実践活動は、学生、教員、子どもたち、その保護者など、実践者、参加者がその都度異なるため、その中でどのような力学が働いているのか、モデルを示すことは難しいと思われるものの、すこしでも「あそびの森」で、何が起きているのかを明らかにしていくことは、保育者の養成、子育て支援にかかわる有用な知見を見出すことができるのではないかと考えている。ただし、定性的な研究手法が必要だと考える。米国においては、実証的な質的研究論文に対して指標が定められている研究領域（Brantlinger et al,2005）もあり、そのような指標を参考にしながら本取組と適切に評価できるよう求めていきたい。

5. 参考文献

Brantlinger, Ellen; Jimenez, Robert et al., Qualitative Studies in Special Education, *Exceptional Children*, 71, pp.195-pp.207, 2005.

内山尚美・大西信行・佐藤朝美・篠田美里・白山真澄・杉山章・杉山喜美恵・高橋摩衣子・田中ヒロ江・藤垣和博・古里貴士・三羽佐和子・山田隆・若杉雅夫, 子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈10〉—平成25年度実施プログラム—, 東海学院大学短期大学部紀要, 第41号, pp.119-pp.133, 2015

6. 資料

平成26年度「あそびの森」プログラム一覧			
場所：東海学院大学短期大学部（西キャンパス）7号館5階「あそびの森」			
時間：午前の部 10時～11時45分、午後の部 13時30分～15時15分			
<前期>		※プログラムは、多少変更になることがあります。ご了承ください。	
回	開催日	プログラム	内容
1	6月21日 (土) 午前/午後	親子で楽しく 運動あそび!	子ども大人も楽しめる、手軽な運動あそびで、梅雨の季節を吹き飛ばそう!
2	7月5日 (土) 午前/午後	カラフルスライムでゼリー屋さん	混色による色の変化を楽しみながら、自分だけのゼリー屋さんになろう!
3	7月19日 (土) 午前/午後	体育あそびを思いっきり楽しもう!	走ったり・跳んだりなど、色々な運動を通して体と心をほぐす体育あそびをしよう!
4	8月9日 (土) 午前/午後	五感をフルにつかった遊びを楽しもう!	何が出るかな…目も手も耳も鼻も、背中も、足も! 体中のセンサーで感じて楽しもう!
<後期>		※プログラムは、多少変更になることがあります。ご了承ください。	
5	10月11日 (土) 午前/午後	楽器をつくってリズム遊びをしよう	身近なもので手作り楽器を作って、色々なリズムや曲に合わせてセッションを楽しもう!
6	11月15日 (土) 午前/午後	こころ・からだ・うた	こころに感じたことを、音楽に合わせて体で表現したり、うたに表したりして、楽しもう!
7	11月29日 (土) 午前/午後	秋の自然を楽しもう! ※懇話会	秋の自然物を使ってあそんだり、作ったりして、秋を楽しもう! (懇話会：保護者の皆様の交流会)
8	12月20日 (土) 午前/午後	おもちゃランドで遊ぼう	ものを使った遊び、うたリズム遊び、つくる遊びなどいろいろな遊びを楽しもう!
9	1月17日 (土) 午前/午後	親子で体を動かして遊ぼう!	親子で踊ったり、ゲームをしたりして思いっきり身体を動かそう。
10	2月14日 (土) 午前/午後	もうすぐ春!	健康に気をつけて、元気にあそびましょう! おにいさん、おねえさんと一緒にあそぼう!

図2 配布した案内

表2 平成26年度 あそびの森 参加者数・参加家族

回	実施日	月例プログラム	家族(組)	参加者数					合計(人)	合計(人) 前年		
				家族(組) 前年	子ども(人)	子ども(人) 前年	保護者(人)	保護者 (人) 前年			保護者 内訳(母・父・他)	保護者 内訳(母・父・他) 前年
1	6月21日	親子で楽しく運動あそび!	29	44	46	77	35	50	(29・6・0)	(44・6・0)	81	127
2	7月5日	カラフルスライムでゼリー屋さん	46	55	75	120	53	55	(46・7・0)	(55・0・0)	128	175
3	7月19日	体育あそびを思いっきり楽しもう!	36	48	60	84	43	53	(36・7・0)	(46・7・0)	103	137
4	8月9日	五感をフルに使った遊びを楽しもう	36	23	61	34	41	25	(35・6・0)	(23・2・0)	102	59
5	10月11日	楽器をつかってリズム遊びをしよう	20	41	30	82	22	47	(20・0・0)	(41・6・0)	52	129
6	11月15日	こころからだ・うた	27	37	45	63	28	40	(26・2・0)	(36・4・0)	73	103
7	11月29日	秋の自然を楽しもう・懇話会	24	40	42	51	28	34	(25・3・0)	(30・4・0)	70	85
8	12月20日	おもちゃランドで遊ぼう	25	34	45	60	28	34	(21・7・0)	(34・0・0)	73	94
9	1月17日	親子で体を動かして遊ぼう	28	31	48	54	33	32	(28・5・0)	(31・1・0)	81	86
10	2月14日	もうすぐ春!	23	0	41	0	26	0	(23・3・0)	(0・0・0)	67	0
11				0		0		0		(0・0・0)		0
合計			294	353	493	625	337	370			830	895